

2022年度



第6回NUFS&NUAS読書コメント大賞に寄せて

名古屋外国語大学長・出版会長 亀山郁夫

皆さん、おめでとうございます。

今回は（1次審査通過の）19点のコメントが受賞の対象となりましたが、月並みな言い方をすれば甲乙つけがたい。大賞だから凄いとか優秀賞だから受賞作の中で劣っていることは全くなく、選者のその時々の問題意識や関心と上手くフィットした作品が受賞となりました。受賞作は夫々に面白いテーマでした。

『とんでもない死に方の科学：もし●●したら、あなたはこう死ぬ』のコメントがとても映像的な文章と思ったら、何と映像メディア学科の学生のコメントでした。大学での学びが、コメントの中にもくっきりと浮き彫りにされていてとても心強く感じました。コメントの最後「逃れられないシリアスな人生にせめてものユーモアを。死臭に慣れたフリして生きるより、よほどいい。」は本当に優れたコピーです。才能を感じました。

『正欲』をコメントした著者は多様性、ダイバーシティの問題に対して鋭い問題意識を投げかけています。多様性の重視というと、全てが許されてしまうところがあるのですが、そこに注目した視点の鋭さが印象的でした。コメントにある「美化された「多様性」という言葉がもつ恐ろしさを、現実味のある内容と、著者の圧倒的な想像力が余すことなく暴いていく。」がとても適格です。「言葉の槍は、あなたの心に深く突き刺さるだろう。私に刺さった槍は、まだ抜けていない。」このコメント締めと冒頭「物語は月に似ていると思う。」は後で展開されていく良いコメントだと思いました。

今回の受賞作のレベルは際立って高く、本学で教育に携わる者の一人として、大きな誇りを感じることができました。それくらい、素晴らしかったということです。これからますますコメント大賞が発展していくといいなと心から念じております。

もし来年、大賞を狙いたいと思う学生は、書き出しと締めに細心の注意を払いましょう。

東アジアが読む日本ミステリー

第6回NUFS&NUAS読書コメント大賞に寄せて

名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館長
藤井省三

12年前に南京大学で、魯迅(ルーシュン、ろじん、1881-1936)の代表作「阿Q正伝」と夏目漱石・村上春樹との系譜的關係について講演したことがあります。講演後には学生さんたちが、日中比較文学をめぐる多くの質問を出して下さいました。

その中に推理小説家のDongye Guiwuに関するものがありました。“Dongye是誰？”と聞き返す私に、“東野圭吾”と書かれた紙が回ってきまして、私は初めてこの作家の存在を知ったのでした。帰国後、大急ぎで『手紙』や『白夜行』などの東野作品を読んだものです。

魯迅の影響を受けて（正確には魯迅に反発して）推理小説作家となった松本清張（1909-92）は、日本ばかりでなく、東アジアの推理小説の開祖です。このような日本ミステリーと東アジアとのご縁は、現在に至るまで深まり広がり続けています。

今年のコメント大賞ではmtmtさんが湊かなえ『夜行観覧車』で受賞しました。日本の家庭問題に取材した推理小説が、中国大陆や香港、台湾、そして韓国でどのように読まれているのか、という想像をめぐらしながら頁をめくるのも一興でしょう。

ちなみに「湊かなえ」は中国や台湾では“湊佳苗”と漢字表記されて、すでに20作ほどが翻訳されています。



『正欲』 朝井リョウ

ペンネーム：無糖（外大 世界教養学科）

物語は月に似ていると思う。月が夜の暗闇を照らすように、物語も人が胸に秘めている孤独や秘密に焦点をあてるからだ。だからこそ、自分の内面を探りあてる物語に人は共感し、感動し、ときに恐怖さえおぼえる。言語化不可能だったものを、あっさりと言語化してしまうからだ。この『正欲』はまさに、秘密を明かさず息を殺して生きている人々に焦点をあて、我々が言語化を拒んだ真実を、言葉という槍で突きつけてくる物語だ。

美化された「多様性」という言葉がもつ恐ろしさを、現実味のある内容と、著者の圧倒的な想像力が余すことなく暴いていく。世界は全ての人が手を繋ぎ円になれるほど簡単にはできていない。そこで、あなたは試される。円の外側にいる想像もしてこなかった人たちを、あなたは「多様性」の一言で円の内側に招き入れることができるのか。言葉の槍は、あなたの心に深く突き刺さるだろう。私に刺さった槍は、まだ抜けていない。



『夜行観覧車』 湊かなえ

ペンネーム：mtmt（外大 英米語学科）

私はSNSが嫌いだ。みんな幸せそうで全員の人生がうまく行っているように見える。しかし冷静に考えてみればそんなことはありえない。誰もが華々しい一面を持つ一方で何かしらの地獄を抱えている。そしてその地獄はなかなか外からは見えにくいものだ。

とあるエリート一家で殺人事件が起こった。被害者は父親、加害者は母親であった。誰もが羨み憧れる一家から一転、子ども達は近所から後ろ指をさされ、友達とも距離ができ、ネットで誹謗中傷を浴びる。側から見れば完璧な一家の中で、一体何が起こっていたのか。

この話は読み進めるにつれそれぞれの抱えていた「地獄」が見えてくる。人の地獄は見えにくく、本人にしかわからないものである。たとえどんなに幸せそうに見える人でも皆どこかしらで苦労して帳尻を合わせているのだ。

綺麗な部分のみが可視化された現代。そんな現代を生きる我々に必要なのは見えない「地獄」を補う想像力かもしれない。



『舟を編む』 三浦しをん

ペンネーム：指人形（外大 フランス語学科）

言葉というものはひとときも形を留めてはくれない。毎日新しい言葉が生まれては消えていく。そのまま死語として人々の記憶から消滅してしまうものもあれば、時にはその形を変え再び命を吹き返すものもある。辞書とは、言葉の意味のみならず、その時代を写す鏡ともなる。

しかし、辞書は一夜にして成らず。さまざまな人々の想いを乗せ、膨大な年月を懸けて産み出される。これは、辞書を造る人々の物語だ。

言葉が変容していくように、人の心は動き続けている。不完全で、たまに立ち止まることもあれど、動くことを完全にはやめられない。時にその人の心は、周囲の人を突き動かす。変える。そうして、想いは受け継がれる。

人の世の美しさとは、想いを受け継ぎ、永遠に紡がれていくところにある。

この物語で、その片鱗を感じてみてはいかがだろうか。



『生まれた時からアルデンテ』 平野紗季子

ペンネーム：きんぶつ（外大 英米語学科）

スマホをみながら食べた晩ご飯。味の感想より動画の内容を覚えている。

そんな私と対極にいるのがフードエッセイストの平野紗季子さんだ。幼少期から「食日記」を綴る平野さんの文章を読めば彼女の食事に対する等身大の愛と敬意を感じずにはいられない。大好きな「食」を全力で楽しんでいる彼女の姿がありありと浮かんでくる。文章から食べ物の匂い、音、色、周りの景色までも見えてくる。食べ物が好きだからこそ生まれた言葉、でもその気持ちわかる！そんな「美味しい」文章が魅力的だ。彼女から食事の儚さ、大切さを教えてもらった。時間に追われる私たちは楽しいはずの食事の席から離れてしまっていたのかもしれない。「食事」と「言葉」と「あなた」を素敵なテーブルに案内し直してくれるのがこの本。

どうやら平野さんの言葉で私の心のレストランは満席になってしまったようだ。

すみません、本日の食事にスマホ用のお席はご用意できませんでした。

優 秀 賞

『戦争は女の顔をしていない』

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ (三浦みどり訳)

ペンネーム：井谷 (外大 世界教養学科)

全く別の世界に来たような感覚であった。

敵の命を奪うことを誰も全く疑わない。それが良い事とされる。死と隣り合わせの世界では、人間は別の生き物に変わってしまうようだ。それが「戦争の顔」なのだろう。

本書には戦争の後にも女性達が「母」という女性の顔を取り戻すことが出来ずに苦しむ様子が描かれる。彼女らは自らの失った「命を育む顔」を取り戻そうと藻掻いた。戦争によって張り付けられた「命を奪う顔」をどうにか引き剥がそうと苦しんでいたのだ。

私自身の体験になるが、授業で今日のウクライナの話になった際、ロシア語の先生が泣いていたことが印象深い。どんなに辛いだろうか、家族の出身国が戦争の当事者になってしまうのは。世界情勢が混乱している現在、日本に生きる我々もこの戦争のリアルに目を向けるべきと考える。ニュースの向こう側に思いを馳せるのである。戦争は女の顔をしていない、しかし戦争に傷つき涙を流すのはいつも女の顔だ。

優 秀 賞

『読書について：他二篇』 ショウペンハウエル（斎藤忍随訳）

ペンネーム：しがない言語学徒 Rin（外大 英米語学科）

ー読書とは、他人にものを考えてもらうことであるー

「読書」とは何かと思い悩んだ私にショウペンハウエルは語りかける。重く申し掛かるこの言葉に私はさらに悩んでしまった。ー読書は思索の代用品にすぎないーと、ショウペンハウエルはさらに私を痛罵する。なるほど私が「読書」だと思い込んでいたものは、ただの思索の放棄だったのか。

しかしどうだろう。もし「本を読む」という営みを止めてしまえば、書架に眠る彼らは誰かに読まれるのをいつまでも、いつまでも翹望することになるだろう。書架に死蔵され、悲しげな顔をした本が今も私の袖を引く。

私は今日もまた、頁をめくってしまう。たとえこの行為が思索の放棄だと言われようとも、私は本と共に鬱蒼とした言葉の森を歩いていく。この歩みこそが私の「読書」なのだ。



優秀賞

『JK、インドで常識ぶっ壊される』 熊谷はるか

ペンネーム：だみ（外大 世界共生学科）

日本の普通の女子高生が、突然インドに引っ越すことに。インターネットを使ってインドについて調べたものの、結局なにも分からないままインドでの生活が始まる。豊かな人が車を走らせる横で、1台のバイクに4人乗りする家族や、大使館のすぐ近くに広がるスラム街など格差社会での光と影を描く女子高生視点のインド滞在を記したこの作品。この作品は著者の実体験であり、著者と同年代の私にとってとても読みやすい作品だった。インターネットだけで知るインドと、現地に降り立って知るインドは全く違うように感じた。安全な国で暮らす私たちが、宗教を信仰している人に対して、「宗教のせいで生活が制限されている」と思ったり、スラム街で暮らす子ども達に対して、「かわいそう」と感じたりする人は少なくないだろう。しかし実際はそんなことはなく、日本人の海外や外国人に対するマイクロアグレッションが、実際は偏見だったと気付かせてくれる作品だ。

優 秀 賞

『氷上旅日記：ミュンヘン-パリを歩いて』 ヴェルナー・ヘルツォーク (藤川芳朗訳)

ペンネーム：もか（学芸大 映像メディア学科）

「あのひとを死なせるわけにはいかない。ぼくが自分の足で歩いていけば助かるんだ」

ニュー・ジャーマン・シネマを代表するヘルツォークが恩師の重病の報せを受け、平癒を祈り、ミュンヘンからパリまでの700キロ、凍てつく大地を歩む。巡礼とも呼べる魂の彷徨は、全編を通して残酷であり美しい。生と死の匂いが嫌でも立ち込める。突き刺すような寒さと冷たい現実、ヘルツォークをもはや人ではなく、この世以外のものへと変えていく。薄れゆく自我が銀世界と溶け込んで1つになる。現実と空想の境界線がなくなった時、初めて美しい世界が目の前に現れる。過酷で無意味とも思える旅。彼にとって旅は目的ではなく、手段なのだ。燃え盛る胸の灯が恩師の元へと駆け立てる。からだのなかを、通り過ぎた、あるやさしいもの。私には見える。開いた窓の向こうに、彼が待ち侘びた永い永い巡礼の雪解けが。今こそ飛び立つのだろう。

優 秀 賞

『十字架』 重松清

ペンネーム：やきとりンゴ（外大 国際教養学科）

親友。それは互いに心を許し合い自然体でいられる存在。私は親友と呼べる存在が欲しく、また誰かの親友になりたい。しかし、この作品においての親友はそんな優しいものではなかった…。

クラスメイトのフジシユンはいじめを苦に自殺した。彼は幼馴染ではあったが、一緒に遊ぶことも話すこともない、ただいじめを傍観していた僕を遺書内で「親友」と呼んだ。これは彼の「親友」として、重く決して降ろすことの出来ない「十字架」を背負った僕の20年を描いた話。

彼を殺した加害者が背負う十字架、彼を見殺しにした僕が背負う十字架、彼の苦難に気づかないまま息子を失った両親が背負う十字架。それぞれが抱える十字架の重さに読んでいくこちらまで苦しくなる。しかし、この重苦しさは確と受け止めるべきものだ。

人の死の重さや残された者達に与える影響の大きさを感ずる一冊。家庭を持ち、母親の立場になってこれを読んだらまた違った感想になるかもしれない。

いいね！賞（一般投票賞）

『とんでもない死に方の科学』

：もし●●したら、あなたはこう死ぬ』

コーディー・キャシディー, ポール・ドハティー （梶山あゆみ訳）

ペンネーム：いも（学芸大 映像メディア学科）

貴方は「死」に恐怖を感じますか？

ここでは敢えて断言しよう、貴方は死ぬのが怖い。どう取り繕っても私たちは死に対してシリアスだ。

包丁、階段、滑りやすい床…… 私たちの生活は死臭に満ちている。「可能性」に塗れた私たちは生存を図る限り、この死臭からは逃れられない……

しかし、本書はそんな生活にひと匙のシニカルさを与えてくれる。概要は書名から察し得るだろう。さまざまな「とんでもない死に方」を科学的な視点でユーモアを加えつつ解説してくれる。

この面白い点はスケールの極端さだ。包丁、階段、滑りやすい床……これが普段。そこに「もしもブラックホールに飛び込んだら」「バナナの皮で滑って死んだら」といった「可能性」を加えてみよう。途端に滑稽さを帯びる。

私が当書に魅力を感じた点はこちらにある。逃れられないシリアスな人生にせめてものユーモアを。死臭に慣れたフリして生きるより、よほどいい。